課題作品の制作における意識調査の考察

吉田　陽子[a]

[a] 湘北短期大学保育学科非常勤講師

【抄録】

教育課程における美術では、具象表現を行うための高い技術を習得することを、必須とはしていない。それにも関わらず、対象物（モチーフ）を写実的に描いたり作ったりすることを善しとし、その意識にとらわれる生徒は多く存在する。更には、理想通りに描くことや作ることが出来なかった経験から、美術に対し根深い苦手意識を抱く生徒の実態に、筆者は何度も直面してきた。

本稿は、高等学校の芸術選択で美術を履修する生徒を対象とし、課題作品の制作における意識調査を行い、その内容を考察したものである。美術Ⅰを履修する生徒に対し、初回授業時のアンケートにて授業を通じて身に付けたい力を問うたところ､｢絵が上手くなりたい｣と回答した生徒は３割にものぼった。この実態を踏まえ、具象表現のみに縛られない指導やアプローチを模索することとした。

【キーワード】

具象表現、アンケート、高等学校美術、意識調査、鑑賞と校内展示

１、はじめに

筆者は､『湘北紀要第41号[1]』『湘北紀要第42号[2]』の投稿において、都立Ａ高等学校の芸術選択で美術を履修する生徒の取り組みを考察し、その指導方法について述べてきた。どちらの内容も、生徒が行う課題作品への制作におけるアプローチ方法を模索した事柄が主となったものである。それらの取り組みから一定の成果は得られたものの、美術全般へ対して苦手意識をにじませる生徒の様子を目の当たりにすることも、決して少なくはなかった。

本稿では、生徒の実態を細かく把握することに重点を置き、数回のアンケートを実施した。まずは初回授業時に開始時アンケートを行い、美術へ対する興味・関心・意欲の調査を行った。また、課題作品が完成したタイミングには、その課題ごとに自らの取り組みを具体的に記述する、振り返りアンケートを実施した。

これらの内容を精査し、生徒一人一人が美術の授業に何を期待し、どんな力を身に付けていきたいのかを探ると同時に、生徒自身にも新たな力が身に付く喜びを実感して欲しいと考えた。更には、授業を通して美術を愛好する気持ちを高めるにはどのようなアプローチが有効となるのか、模索を重ねる課程を記していく。

２、現場の紹介

筆者は10年以上にわたり都立A高等学校に勤務し、全学年の美術を担当している。

１学年の生徒は、音楽・書道・美術の中から一つを選択し履修するカリキュラム構成となっており、今年度は81名が美術を選択している。１～６組まである中で、2クラスずつが合同となり授業が行われているため、１学年の場合は3コマ同じ内容の授業を展開することになる。しかし、生徒の個性や各クラスの雰囲気は様々であり、3コマとも全く同じような授業にはならないのが現状である。

２学年の生徒は、1年次に美術を選択していることが履修の条件と定められているため、前年度から行ってきた指導を継続させることが可能となる。そのため大まかには生徒の実態が掴めており、お互いの信頼関係も築きやすい環境にある。今年度は定員にほぼ近い19名の生徒が履修している。

これに対し３学年の生徒は、1年次の履修科目に関わらず美術を選択することが可能となる。そのため、3年間継続して履修している生徒もいる一方で、初めて顔を合わせる生徒も存在する。今年度は、2学年同様の人数が履修している。

２学年や３学年になると選択科目の幅が広がり、芸術の選択は必須ではなくなる。そのためよほどの希望者のみが美術を選択することになるのだが、進路に必要である場合や純粋に美術への興味・関心の強い生徒が選択する一方で、単位が取得しやすいと感じ選択する生徒も数名見受けられる。そのような印象を抱く生徒が存在する要因の一つとして、定期考査を行わないことが理由に挙げられる。筆者は、考査という手法を活用しない代わりに、期限内の課題作品提出を必須としている。課題作品は、筆者の設定した条件を満たした内容でなければ採点不可となるが、その条件は概ね課題作品を充実させるために設定したものであり、努力次第でクリアできる技法にとどめている。

３、初回授業アンケートの実施と結果

昨年度は新型コロナウイルスの影響で6月半ばまで対面授業を行うことが叶わず、自宅課題を採点しながら手探りのスタートとなったが、今年度は無事4月から新入生を迎えることができた。その喜びをかみしめながらオリエンテーションを行ったのち、美術履修者へアンケートを行った。

アンケートの目的は、美術へ対するこれまでの取り組み状況や意識調査を行うものとし、その回答は一切成績に反映されないこと、今後の授業内容向上と本稿作成に活用することを伝えた上で、了解を得た生徒のみ回答を求めた。１学年は78／81名分、２学年は19／19名分、３学年は17／19名分の回答が得られた。

３－１．１学年　初回アンケート

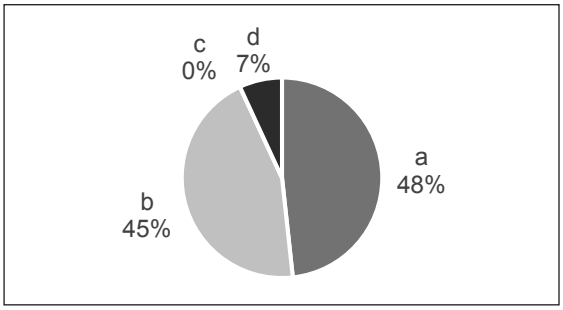
１学年は全員初めて顔を合わせることになる為、質問項目を①～⑥までと多く設定した。

①まず、芸術科目が3種類ある中で美術を選択した理由を４択にして問うた（**図表１**）。「興味・関心があるから」「取り組みやすそうだから」という項目がほぼ同数を占め合わせて9割を超えた。「その他」の項目は記述式としたところ、「どれも苦手でくじ引きで決めました」とのユニークな回答も見られたが、「他を選択したが、希望が通らず美術になった」という該当者は見られなかった。この結果から、美術全般へ対しての激しい抵抗感を抱える生徒は少ないと推察される。

②次にこれまで美術で行った活動のうち、楽しかった課題と苦手に感じた課題について問い、その理由を記述形式で求めた。楽しかった方の回

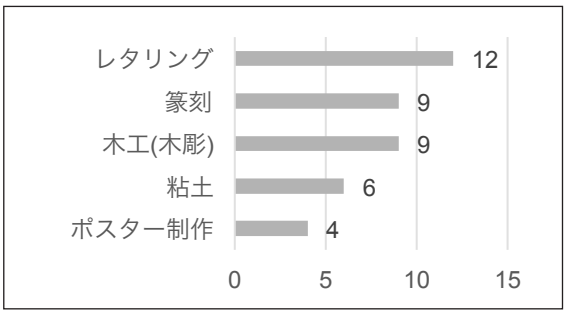
図表１

芸術科目（美術・音楽・書道）のうち、美術を選択した理由について、以下のａ～ｄのうち一番近い内容に〇を付けて下さい。当てはまるものがない場合は、ｄに記述して下さい。
a、興味・関心があるから
b、取り組みやすそうだから
c、他を選択したが、希望が通らず美術になった
d、その他（　　）



図表２

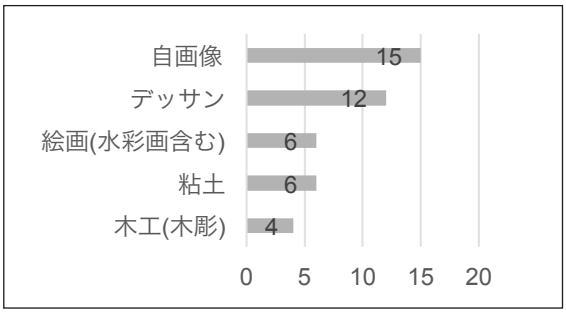
これまで行った美術の活動のうち、楽しかった課題は何ですか？



※少数の回答は省略

図表３

これまで行った美術の活動のうち、苦手に感じた課題は何ですか？



※少数の回答は省略

答（**図表２**）では、“レタリング”と呼ばれる文字を美しく読みやすい字にデザインする課題が最も多く、次いで“篆刻（てんこく）”という印を彫る課題、“木工（本稿では木彫など彫刻刀を使用した制作全般含む）”や“粘土”などの立体造形が続いた。“レタリング”を挙げた具体的な理由には、「自分の名前をうまく書く事ができ、日常でも明朝体で文字を書こうという意識を持つきっかけになったから」「上手くできた時があった」などの成功体験を通した記述が多く見られた。“篆刻”や“木工（本稿では木彫などの彫刻刀を使用した制作全般含む）”では、「削るのが楽しいから」「いろんな彫り方をしながら作品ができて、嬉しかった」との記述から、彫ったり削ったりという制作過程にも魅力を感じている様子が見られた。「粘土」の記述には、「粘土でものを作るのが好きだから」「自分の好きな形にできた」などと素材の感触や可塑性を楽しんだ印象を受けた。

③苦手と感じる内容（**図表３**）には、“自画像”や“デッサン”など、一般的には対象物を写実的に描く傾向の強い課題が３／１以上を占めた。“自画像”の理由には、「全然似てなかったため」「絵が下手で自分に似なかったから」「絵を描くのが苦手」など同様の意見が複数見られたことから、“自画像”＝似せるべきとの固定概念を持つ生徒が多いように感じた。次いで“デッサン”では「上手に描けなかったから」「絵を描くのが苦手なので」「全然うまくいかなかった」「明暗や形を表現するのが難しかった」など、“自画像”で見られた記述と共通する内容もあった。

これらの結果から、楽しいと感じる課題からは制作する行為自体に魅力を持てており、苦手と感じる課題からは作品が思い通りにならなかった状況が見て取れる。

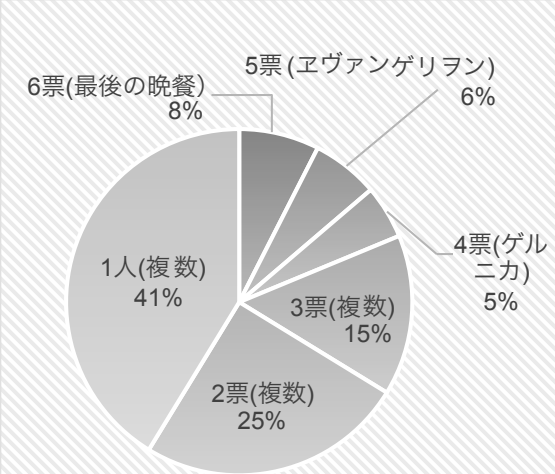
④では教科書[3]を活用しアンケートを行った。今日において美術という教科の含む対象は大変に

幅広い。時間軸で切り取ってみても、紀元前の壁画や土器、彫刻などが現在にも残されているかと思えば、同時代を生きるアーティストが様々な手法で表現する現在進行形のジャンルも存在する。美術館などの整った環境で展示されている作品もあれば、日常に溶け込んだプロダクトデザインも含まれる。素材や目的も多種多様であることから授業内ですべてに触れるのは困難であるため、筆者は教科書から学びの糸口を見つけている。生徒がどんな作品に興味・関心を持っているかを探るべく、次の質問では教科書の中から気になった作品を一つ選び、その理由を記述させた。

教科書には膨大な数の作品が掲載されているため、結果には予想通りバラつきが見られたが、それでも一部同じ回答が見られたのでその特徴を探っていく（**図表４**）。回答の多いタイトル順に、レオナルド・ダ・ヴィンチ『最後の晩餐』6票、庵野秀明『エヴァンゲリヲン新劇場版：破』5票、パブロ・ピカソ『ゲルニカ』4票、マウリッツ・コルネリス・エッシャー『描く手』、萬鉄五郎『赤い目の自画像』、ハロルド・ユージン・エジャートン『ミルクの滴の小冠』、畠山直哉『BLAST』各3票と続いた。複数回答の多かった『最後の晩餐』の選択理由には、「中学校の国語で『最後の晩餐』を学び、印象に残っていたから」「中学の頃に遠近法を習った時に見たのが『最後の晩餐』で印象に残っていたから」など、他教科でも題材が扱われたことから印象深かった様子が伺える。同じく『ゲルニカ』にも「中学3年生の時に授業でピカソについて学んだから」「中学の美術の一番の思い出だから（先生が詳しく説明していた）」などの記述が見られ、学習の機会の多さが反映されていた。二番目に多く挙げられた『エヴァンゲリヲン』は、資料のカテゴリーに設けられた“インタビュー　美術の仕事”という人物に焦点を当てたページに掲載されている。1995年にテレビアニメからスタートした『新世紀エヴァンゲリオン』は、現代の若年層への認知度も高くその関心の高さから選ばれたのが分かる。また、萬鉄五郎『赤い目の自画像』には上記とは風合いの異なる記述が見られた。キャンバスに油彩で描かれているこの作品は、画面全体が赤く染まったような上半身の自画像である。「顔や服の色がバラバラなのに、影に見えたり不自然じゃないところがすごいと思ったから」「どんな感情を込めて描いたのか気になるから」「自画像だけど自分とはかけ離れていて、人間味のない独特なところがいいと思いました」との記述が見られたが、これは苦手と感じた課題に挙げられた“自画像”の捉え方とは異なり、写実表現のみに囚われていない。表現の幅は様々ある事を自然と受け入れているようだ。

図表４

教科書の中で、気になった作品を一つ選び、その理由をなるべく詳しく記述してください。



※3票は4作品、2票は10作品、1票は３３作品に分かれている

少数回答の中には「なんか好き」「キレイだから」「〇〇がおもしろいから」などストレートな感情で作品を鑑賞した記述が見られた。中でも飾り気のない言葉で表現された回答を二例紹介する。一例目の岩佐又兵衛『洛中洛外図屏風舟木本

(左隻)』は、江戸時代に描かれた京都祇園祭りの風景で、金をふんだんに用いてきらびやかに描かれている。この作品を選んだ生徒は「祭りのガヤガヤしている雰囲気が好きだから」と絵の世界に自然と引き込まれたような感想を述べた。二例目、増田尚紀『ティーポット』は、伝統的な山形県の鉄器に鮮やかな色や重心の高い形を取り入れた鋳鉄の鉄瓶である。これに対し「このティーポットで入れたお茶はぜったい美味しい」との感想があり、思わず微笑んでしまった。美術は決してアカデミックなものだけに囚われるものではないと考える筆者は、前述した生徒のように作品を素直に受けとめる瑞々しい感性も大切にしていきたいと、決意を新たにした次第である。

⑤次の項目では、美術の授業で身に付けたい力について質問した。自由に記述する形式としたため、多様な回答が見られるかと思っていたところ、結果として驚くほど似通ったキーワードに遭遇した。それは「絵が上手くなりたい」である。「画力を上げたい」「絵を描く力を付けたい」など多少の言葉の違いはあるが、この内容に該当する回答は全体の3割にものぼった。枕詞のように、「絵心がなさすぎるから…」「絵が下手だから…」と付けられた回答も見られ、思わず胸が痛んでしまう。生徒たちが多用する絵の上手・下手は、おそらく写実表現に焦点を当てた出来栄えのことだと推察される。この現状を踏まえ、美術の授業を通して身に付けるべき力は決して写実表現に偏ったものではないことを繰り返し指導し、浸透させていきたいと考えた。

⑥最後の質問では、作品の校内展示に関する内容とした。これまでも筆者は、課題の単元ごとに完成した生徒作品の展示を行ってきた。入学当初から１学年には、廊下や階段の踊り場に展示された先輩たちの作品を目にする機会を設けておいた。アンケート記入前のオリエンテーション時に、授業内で完成作品の鑑賞を行うことや、それらは校内の展示スペースへ飾る可能性もある（作品の展示を拒否しても良い）旨を周知させた。これらの説明を踏まえ、校内展示に関する自由な意見を求めた。多かった回答は、「いろんな人に作品を見てもらえるので良い」「いろんな人の作品が見れる」というもので、概ね肯定的な意見が占めた。「恥ずかしい」や「自信がないから少しイヤだけど、少しでもほめてくれたら嬉しい」など、年相応の素直なコメントも見られた。しかし、他の項目にはほとんど見当たらなかったのだが、１/４ほどが未回答であった。この結果にアンケートの集計直後は疑問を感じていたが、もしかすると作品展示に関わる頻度の差もあるのではないかと思い当たった。この推察は、２学年のアンケートに反映されている。

３－２．２学年　初回アンケート

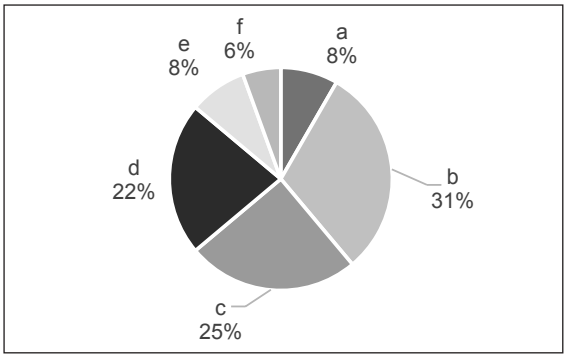
２学年の美術履修者は、１学年の芸術選択において美術の単位を習得した生徒に限られており、授業へ意欲的に取り組むことが求められている。実際のところ生徒の課題への取り組む姿勢は大変良く、皆集中して作品制作を行っており、感心することもしばしばある程だ。昨年度から行ってきた学習が基盤にあるため、筆者としても指導がスムーズに行える印象にある。

初回の授業アンケートは、①美術を選択した理由について該当項目の選択、②授業で身に付けたい力についての記述、③校内作品展示についての記述、以上3点とした。

①では複数回答も可とし、美術を選択した理由について、詳しく分析することにした（**図表５**）。必要に応じて記述も可能にしたところ、「勉強したくないから」との意見もあったが、全体としては生徒の実態が表す通り、前向きな結果となった。

図表５

美術を選択した理由ａ～ｆのうち、当てはまるすべてに〇を付けて下さい。その他の回答がある場合は、ｆに記述して下さい。
a、進路に必要なため
b、興味・関心があるから
c、作品制作を行うことが好きだから
d、知識や技能の向上を目指すため
e、単位が修得しやすいから
f、その他（　　）



②では授業で身に付けたい力について、自由な記述を求めた。１学年の回答には見られなかった特徴として、何をどうしたい（どうなりたい）のかという、具体的な内容まで考えられている点が挙げられる。１学年では「絵が上手くなりたい」という漠然とした回答が３割を占めたことは前述した通りだが、近いニュアンスの内容においても２学年の場合は目指す方向がより明確になっている。例として「デッサンなど物を描いたことがないので、より本物に近い作品が描けるようになりたい」「物を見て描く力を身に付けたい」「静物デッサンが好きなので、よりリアルに描けるようにしたい」「絵がうまく描けるよう技術を身に付けたい。影とか透明感の出し方を覚えたい」などの回答に見られる。

また「1年で作ったことのないようなものにも取り組みたい」「まだ使ったことのない道具を使いこなせるようになりたい」「普段扱えないものを授業なら使えるから、扱えるようになりたい」など、未知の教具・教材へ向けた探究心が伺える内容もあり、生徒が美術を愛好する気持ちに多少なりとも寄り添えたように感じた。図らずもやる気のある生徒たちで構成されたクラスとなった２学年には、この恵まれた環境を大いに生かした実りの多い授業を行うよう、筆者は決意を新たにした次第である。

③は校内展示に関する意見を、１学年同様に調査した。２学年の生徒はすでに自らの作品が数回にわたって展示されている環境にあるため、好意的な記述ばかりが見られた。「自分の作品が展示されるのは嬉しいし、皆の作品を見るのも楽しい」という意見に代表されるよう、1学年の回答に見られた恥じらいの言葉は、驚くことにひとつも見られなかった。なかには「私の技術をみんなに見せたい」との記述もあり、自己肯定感を高めるのにも有効に働くと感じた。

また、筆者が想像すらしていなかった回答に「帰る時に（校内の）いろいろな作品が見れて嬉しい」「いろんな人の作品を見ると、次、自分が作るアイデアにもなるから好き」という意見もあり、学校生活の中に美術が浸透しつつあることが知れて、嬉しい手ごたえとなった。

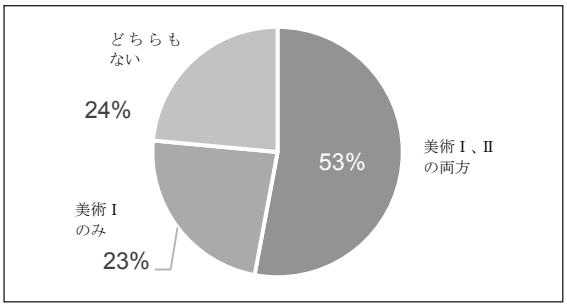
３－３．３学年　初回アンケート

３学年の美術履修者は、１学年から継続して履修している生徒、1学年のみ履修した生徒、３学年に初めて履修した生徒が混在したクラスとなっている。授業へ意欲的に取り組むことが目標ではあるが、取り組みの姿勢には個人差が大きい。活発でダイナミックな活動を好む生徒がいる一方で、粘り強く集中して取り組む生徒もおり、個性豊かなメンバーが集まった印象である。

初回の授業アンケートは、①美術を選択した状況について該当項目の選択、②美術を選択した理

図表６

美術を選択した状況について当てはまるものすべてに〇を付けて下さい。
（美術Ⅰ　・　美術Ⅱ　・どちらもない）



由について該当項目の選択、③授業で身に付けたい力についての記述、④校内作品展示についての記述、以上４点とした。

①では、これまでの美術の選択状況を調査した（**図表６**）。１学年２学年とも履修してきた生徒が半数以上いるのに加え、１学年のみ履修（当時も筆者が担当）の生徒も合わせると、３／４の生徒は授業での関わりが持てている。

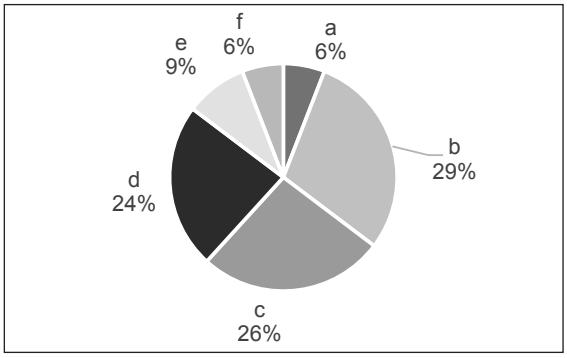
②では複数回答も可とし、美術を選択した理由について、詳しく分析することにした（**図表７**）。全体としては、２学年同様前向きな結果となった。

③では美術で身に付けたい力について質問した。「基礎的な知識を増やしたい」「構図と光の表現」「１、2年生で使えなかった道具を学び、2年間の経験を生かして頑張りたい」など明確な目標を記述できている生徒と、「想像力」「きれいに描きたい」など漠然とした回答に分かれた。

④では校内展示に対する意見の記述を求めた。ここでも③同様に意見が分かれた。「いろんな人にどんな事をやっているか見てもらいたい」や「みんなに見てもらう事により、いい作品を完成させたくなる」など半数以上は好意的に受け止めていたが、「はずかしいからあまり見られたくないです…」「飾らないでほしい」「特になし」など消極的な回答も見られた。実際の授業が開始されてからも展示を拒否する生徒はわずかではあるが出ており、その際には本人の気持ちを尊重することとした。

図表７

美術を選択した理由ａ～ｆのうち、当てはまるすべてに〇を付けて下さい。その他の回答がある場合は、ｆに記述して下さい。
a、進路に必要なため
b、興味・関心があるから
c、作品制作を行うことが好きだから
d、知識や技能の向上を目指すため
e、単位が修得しやすいから
f、その他（　　）



４、課題の選定と鑑賞について

都立Ａ高等学校は三学期制を採用している。1、2学期それぞれに中間考査と期末考査があり、3学期は学年末考査のみ行われる仕組みとなっており、年間で計5回の考査期間が設けられている。美術では考査を実施しない代わりに作品提出を必須としているため、各課題作品は考査1回分の重さと同等である旨を説明している。すなわち定められた期限内に作品を提出出来なかった場合は、考査を受けなかった立場に相当するという位置づけである。そのため当然のことながら大多数の生徒が期限内に課題作品の提出を行う。

本稿執筆時である1月現在は、2学期までの内容に該当する。これまでに行った課題は、以下の通りである（**表１**）。

４－１．１学年　課題の選定

１学年①**スクラッチ画**は、中学美術で学ぶケースが高いモダンテクニックの一つである。今回はあらかじめスクラッチ専用の黒いボードを準備し、ニードルという先の尖った専用の道具を貸し出した。採点の条件は、5種類以上の線表現を取り入れる事とし、導入時に皆で実技練習を行い、課題の意図を体感させた。作品のテーマは自由とし、絵だけでなく､文字や模様（柄）なども可としている。

②**点描画**は、その名の通り点のみで描く絵画技法である。色彩豊かな無数の点で画面が構成されたジョルジョ・スーラの作品が有名であるが、授業では黒の0.3㎜油性ペンのみの使用とした。あえて単色の設定とした意図は、点の数を増減させることで容易に明暗を作り分けることが出来るからだ。また、点の量を緩やかに増減させることで、グラデーションを表現することも可能となる。導入時、皆で一斉にこれらの実技練習を行った上で、グラデーションを作品内に取り入れることを採点の条件とした。またこの課題は、紙ではなく薄い透明なプラスチックのシートを被写体とした。これにより、描きたい資料がある場合、被写体を資料の上に固定し点でなぞっていくことで描きたい対象を写し取ることが可能となる。

③**ポスターコンクールの課題**では、区の環境部環境政策課環境学習科が実施する、環境ポスターコンクール作品に取り組んだ。ただし、コンクールの応募は必須とせず、生徒各自の判断を尊重することにした。授業課題の条件は、指定の画用紙に水彩絵の具を使用して描くこと、テーマに沿った標語を入れること、である。画用紙は大と小の２サイズを用意し、コンクールに応募する生徒のみ大サイズを必須とした。水彩絵の具の基本的な扱い方は全体指導を数回に分けて行い、各自の経験や技能を見極めながら個別指導を平行させた。約半数近い生徒がコンクールにチャレンジし、見事1人が入選を果たした。

４－２．２学年　課題の選定

２学年①**クリップマグネット**の作品は、日常生活に活用できる題材とした。指定のマグネットに紙粘土で装飾を施す内容で、食べ物をテーマに据えた。なるべくリアルな表現が行えるように、細かな造形に適した粘土を準備した。粘土は、あらかじめ水彩絵の具で色を混ぜ込むことも、造形後に上から着色することも可能である。仕上がった色とりどりの作品群は、クリップに挟んだキャプションと共にホワイトボードに貼り付け、展示スペースを華やかに彩った。

②**砂絵**とは、砂を使用して描く絵を指すが、単色の砂に凹凸をつけて描いたものと、あらかじめ色のついた砂を画面に定着させて構成するものがある。授業では後者の方法を採用した課題である。シール状になったカッティングシートに絵や文字などを自由に描き、切り抜いたパーツにごとに色の砂をまいていくことで、徐々に作品が仕上がっていく。課題の条件にグラデーションを取り入れることを設定したが、1年次での学習で基礎知識を持ち合わしている為、実技指導を行った際の理解度が高かった。

③**エコバックのステンシル**では、昨今では浸透してきたエコバックの存在から環境問題を学ぶと同時に、自らの手で作った作品を使用する喜びを醍醐味とした。制作にはステンシルという版画の技法を活用した。版の形状は４つに分類される旨は教科書から学ぶと同時に、1年次に凸版を、2年次には孔版の仕組みを経験する。エコバックは布素材のため、画材には布専用の絵の具やスプレー、スタンプ台を準備した。一般に販売されていても違和感を持たないくらいのレベルを目指す生徒も

多く、それぞれのこだわりを感じる課題となった。

④**木彫鏡**では、のこぎりやのみ・木槌、彫刻刀といった専門性の高い道具に触れ、新たな技能を身に付ける機会とした。長方形の板を必要に応じてカットし、生徒各自の創造する形に造形し、着色や仕上げを行う。合わせて、木材に適した塗料や紙やすりの特性も学ぶ。

４－３．３学年　課題の選定

３学年①**螺鈿シート切り絵**では、まず螺鈿（らでん）という素材についての基礎知識を身に付けることから始めた。主に漆器や帯などの伝統工芸に用いられる装飾技法であるが、実際の工芸品を目にする機会は決して多くないと推察されるためだ。本物の螺鈿は貝殻の内側にある虹色光沢を持った真珠層の部分を切り出し、板状にしたものだが、今回の教材にはホログラムシートを代用した。4種類のホログラムシートを細かくカッティングし、黒い光沢のある台紙に貼り付け構成していく。課題の条件に、細かく連続する形を取り入れることを定めたが、完成度には開きが見られた。

②**篆刻**とは、木や石などの素材に印を彫る行為である。今回は比較的柔らかい天然石を採用した。課題の条件には、印面だけでなく持ち手部分の造形も必須とした。持ち手部分は、金やすりという硬い素材を削ることのできる道具を使用する事で、特別な技術を習得していなくても、直方体の形状を大きく変えることを可能にした。中にはこちらの予想をはるかに上回る構想を練り、またそれを実現した生徒もおり、皆に良い刺激を与えてくれた。

③**油彩画**とは、油で溶いた絵の具を使用し、主にキャンバスにと呼ばれる布製の被写体に描かれた絵画を指す。水彩絵の具は絵の具を水に溶いて使用するが、油彩絵の具は専用のオイルを使用して描く。また、油絵具は油性のため、一度衣類に付くと色が取れなくなってしまうので、注意が必要である。水彩絵の具に比べ乾燥スピードが格段に遅い特徴もあるため、例年絵の具の扱いに苦戦する姿が見られる。このような様子であっても課題に組み込む理由には、専門知識を持たない生徒が単独で油彩画を行うには、なかなかに困難な状況であると推察されるからだ。最低限の画材をそろえるにはある程度の費用がかかってしまうこと、またその環境を整える難しさから、学校の授業で一度経験しておくことが望ましいと考えた。

④水墨画では、墨のみを使い絵画表現を行うこととした。生徒にとって墨を扱うのは書道での経験値が多くを占めるため、文字を書きたがる姿も見られたが、今回の課題では墨の濃淡やかすれ、にじみなど墨ならではといえる幅のある表現に着目させた。薄墨、中墨、濃墨の三種類を各自に準備させ、水墨画の基本的な表現方法を体感させた。

表１　課題の選定

	１学年	２学年	３学年
1学期	①スクラッチ画(絵画：モダンテクニック) ②点描画(絵画：点描)	①クリップマグネット(立体造形：粘土) ②砂絵(デザイン：カッティング)	①螺鈿シート切り絵(工芸デザイン:カッティング) ②篆刻(立体造形:石彫)
2学期	③ポスターコンクール(デザイン:グラフィック) ④木版カレンダー(版画：凸版)	③エコバックのステンシル(版画：孔版) ④木彫鏡(立体造形：木彫)	③油彩画(絵画：油彩) ④水墨画(絵画：墨絵)

４－４．課題の鑑賞

単元ごとの作品提出が終了した後は新たな課題に取り組むことになるのだが、その間に鑑賞の時間を設けている。同じクラス内で制作している仲間がどのような取り組みをしているのかを紹介するのは勿論のこと、他のクラスの生徒作品も一部提示し、魅力的な表現を共有する時間としている。この時間は筆者にとっても深い感動を覚えるひとときであり、目の前の生徒たちがどんなことに関心をもち、時に驚き、共感し、心を動かすのかを肌感覚で知ることのできる貴重な瞬間でもある。

授業内での鑑賞が終了した後は、校内展示へと移行する。校内には一階の校長室・経営企画室前の廊下壁面スペースと、飲食料品の自動販売機を対面にした壁面スペースがある。後者のスペースは画鋲のさせるボード状となっており、一度に複数の作品展示が可能である。階段踊り場の壁面スペースにも作品展示が可能だが、一階廊下同様に額装された作品のみに限られる。

展示作品の入れ替えを行っている最中や、作品の前を通りすぎた時など、ふいに声をかけられることがある。生徒の頑張りをたたえる言葉を戴いたときには、思わず我が事のように喜んでしまう。また、生徒が友人たちに作品解説をする姿を見かけることもあり、そのたびに微笑ましくなる。美術の持つ力、ひいては生徒ひとりひとりの頑張りを改めて痛感する機会となっている。

５、振り返りアンケートの実施と結果

ここからは単元ごとの作品提出を終えた生徒が、具体的にどのような力を身に付けたと感じているのかを調査していく。筆者が論文を執筆している現時点までの集計結果となるので、年間を通した振り返りが行えないのは残念ではあるが、初回授業時に見られた回答と照らし合わせながら、可能な限りの考察を行うこととする。

５－１．１学年　振り返りアンケート

①課題「スクラッチ画」

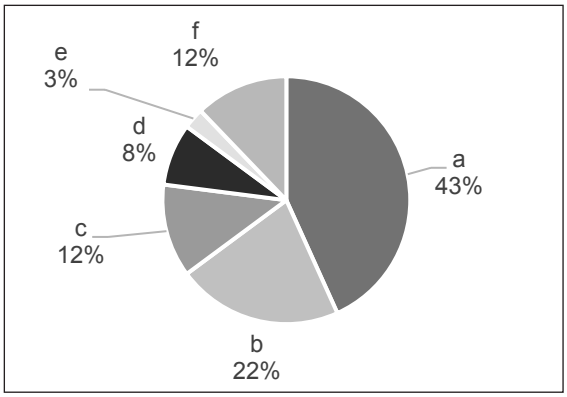
回答の内容が近いものをまとめたところ、大きく６つに分類することが出来た（**図表８**）。

半数近くを占めたのが、「集中力」という言葉であった。この結果に筆者は驚きを感じないのは、事実として懸命に取り組む姿を目の当たりにしたからだ。これまで生徒がどのような様子で美術の授業に取り組んでいたのか知る由もないが、今回の課題を通して集中力が養えたことは事実だと言い切れる。

次いで、道具の扱い方や力の加減など、技能面についての意見が多く挙げられた。「ニードルを使うのは初めてだったけど、使うたびにコツをつかむことができた」「『描く』とはまた別の『削る』

図表８

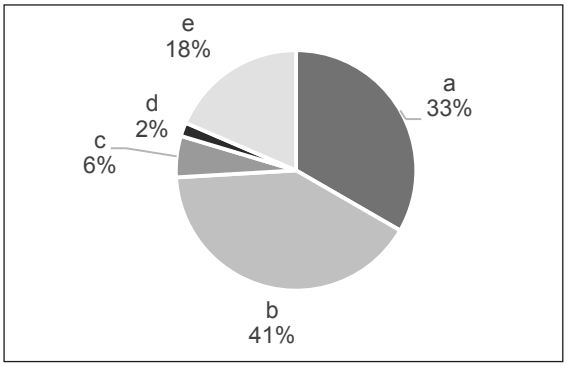
課題「スクラッチ画」の制作で、どんな力が身に付きましたか？
※ａ～ｆは生徒の記述を分類した内容
a、集中力
b、技能
c、技術・表現力
d、構成力
e、その他
f、分からない・未回答



図表９

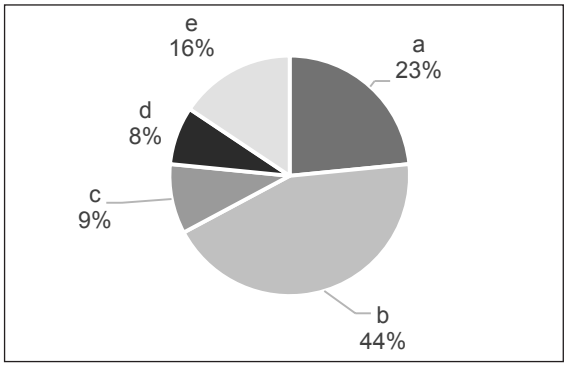
課題「点描画」の制作で、どんな力が身に付きましたか？　※ａ～ｅは生徒の記述を分類した内容

a、集中力・忍耐力
b、技術・表現力
c、判断力・観察眼
d、その他
e、分からない・未回答



図表１０

課題「ポスターコンクール」の制作で、どんな力が身に付きましたか？
※ａ～ｆは生徒の記述を分類した内容
a、集中力
b、絵の具の扱い・技術
c、想像力
d、描写力・表現力
e、その他
f、分からない・未回答



という感覚」との回答に見られるように、新たな技能習得を実感したようだ。

また、「細かい作業の楽しさが身に付きました」「細かく丁寧に削る力」「繊細な動きができるようになった」などの言葉にある通り、技術や表現力の向上も見て取れる。

「見る人が、どうやったら見やすくなるかなどを考える力」「絵のバランス」「自分で好きなデザインを選んだり考えたりして作成すること」など、画面構成にまで及んだ記述には、大きな手応えを感じた。

一方で、「わからない」との回答や未回答は残念ながら1割を超えた。

②課題「点描画」

回答の内容が近いものをまとめたところ、大きく５つに分類することが出来た（**図表９**）。

前回の課題同様に、「集中力が付いた」という回答は多く見られたが、その言葉に付随して「忍耐力」も加わったのには、良い意味で追い込まれた生徒もいた可能性が示唆できる。「細かいところも面倒臭がらずに、最後までやり通す力」との記述からも成長が伺える。

集中力に関する回答よりも多く見られたのは、点描という技法で作り上げる表現や技術に関する記述であった。「点の濃淡で作品を立体的に見せること」「色が一色しかない場合の強弱の付け方」に加え、課題の条件としていたグラデーション技法の習得に関する内容も見受けられ、課題の意図も認識できているようだ。

さらに踏み込んだ意見には、「やりきること。作品をしっかり見て、改善点を見分ける力」「モノクロでない写真でやったことで、どこを濃くするのか薄くするのか判断しながら作った」など、自ら考え模索する姿が見られた。

残念ながら今回も1割以上の生徒は「わからない」もしくは未回答であった。

③課題「ポスターコンクール」

回答の内容が近いものをまとめたところ、大きく６つに分類することが出来た（**図表１０**）。

この課題では絵の具の扱い方に重点を置いた指導となった為、それに反映された回答が多く見られた。「絵の具で色を重ねる時の水の濃さを調節する力」「絵の具の扱いが上達した」「色の塗り分け方」などに見られる通りである。

「集中力」に関する回答は依然として複数あり、それなりの姿勢で取り組めていたため納得ではある。

また、表現の幅に広がりが出たという回答も見られた。「グラデーションを作る時の力加減」「制作を通して、言葉と絵だけで伝える表現力が身に付きました」「絵を描く力」などに見られる。

その他の意見には、「大きい紙に絵を描くこと」や「どこから色を付けるか、絵をかこうかという気持ちが身に付きました」「自分なりに行動する力」などの記述からは、前向きに挑戦した気持ちに対し自己肯定感が育まれたように推察される。

今回も未回答は見られたが、記述の内容からは各自の成長が垣間見れるものとなってきた。

５－２．２学年　振り返りアンケート

①課題「クリップマグネット」

回答の内容が近いものをまとめたところ、大きく６つに分類することが出来た（**図11**）。

１学年同様に「集中力」についての記述は見られたが、大きな違いは「集中するのは大前提」という意識である。「集中力が上がった」「さらに高まった」とのコメントには頷ける。

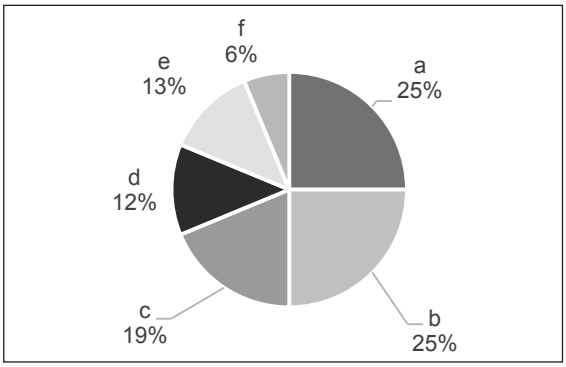
作品には細かい表現が多く見られたのもあり、「ちょっとは器用になれた」など技術の向上を自覚した回答も見られた。

またこの課題ではリアルな表現を目標に掲げていたため、より本物に近い色彩を出すべく試行錯誤する姿も多く見られた。その甲斐あってか、「自分の作りたい色が出せるようになった」「絵の具の色を調節できるようになった」などの喜ばしい成果が記入されていた。

その他の意見には、「どうすれば思い通りに作れるか考える力」に着目した生徒もおり、自ら技術を伸ばしていく姿も見られた。

図表１１

課題「クリップマグネット」の制作で、どんな力が身に付きましたか？
※ａ～ｆは生徒の記述を分類した内容
ａ、集中力
ｂ、技術
ｃ、色彩表現
ｄ、立体感覚
ｅ、その他
ｆ、分からない・未回答ｅ、分からない・未回答



②課題「砂絵」

回答の内容が近いものをまとめたところ、大きく６つに分類することが出来た（**図12**）

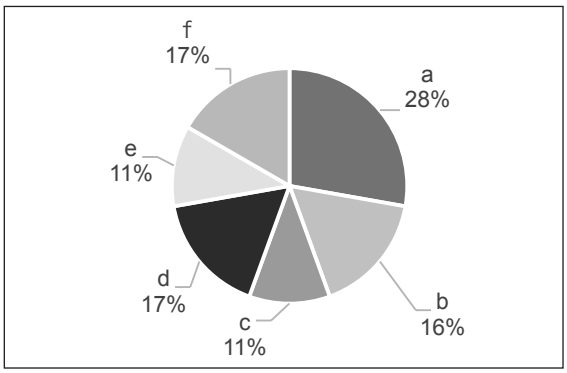
この課題ではあらかじめ色のついた12色の砂を使用する。またそれぞれの砂同士は混色が可能なため、様々な色彩表現が可能となる。「自然なグラデーションを作る力」「色の構成力」など生徒の回答で多く見られた色彩表現についての関心は、筆者の狙い通りである。

今回も集中力についての記述が見られたが、「集中力と諦めない心」との内容には根気強く取り組んだ様子が伺える。その他の意見には「自分は絵の具が苦手だったが、砂絵は思いの外うまくいっ

たのでビックリした」と嬉しい発見の声も見られた。

図表１２

課題「砂絵」の制作で、どんな力が身に付きましたか？
※ａ～ｆは生徒の記述を分類した内容
a、色彩表現
b、技能
c、想像力
d、集中力
e、その他
f、分からない・未回答



③課題「ステンシルのエコバック」

回答の内容が近いものをまとめたところ、大きく５つに分類することが出来た（**図13**）

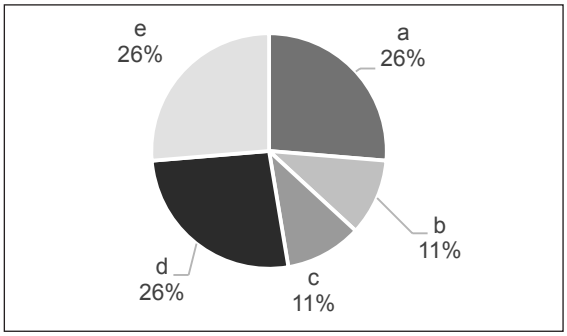
この課題では教科書を活用し、版画の種類につて学んだ。それを反映するかのように「新しい技法が学べて楽しかった」「新しいことに挑戦できた」「新しい技法が身に付きました」との声が見られた。描くという行為とはまた違う手法の魅力を、それぞれ味わえたようだ。

また「デザインの工夫」との回答にあるように、デザイン領域にあたることも感覚的に掴めている生徒も数名見られ、エコバックという支持体が持つ特性を鑑みた作品が多かった。

その他の回答には「今まで細かい作業はあまり出来なかったけど、今回でできるようになった気がする。」との声もあり、課題を通して身に付いた技術力を実感した様子が見て取れた。このように成功体験が積み重なり、確かな自信がついていくような指導を目指していきたい。

図表１３

課題「ステンシルのエコバック」の制作で、どんな力が身に付きましたか？
※ａ～ｅは生徒の記述を分類した内容
a、新しい技法や道具について
b、デザイン・構成
c、集中力
d、その他
e、分からない・未回答



５－３．３学年　振り返りアンケート

①課題「螺鈿シート切り絵」

回答の内容が近いものをまとめたところ、大きく６つに分類することが出来た（**図14**）。

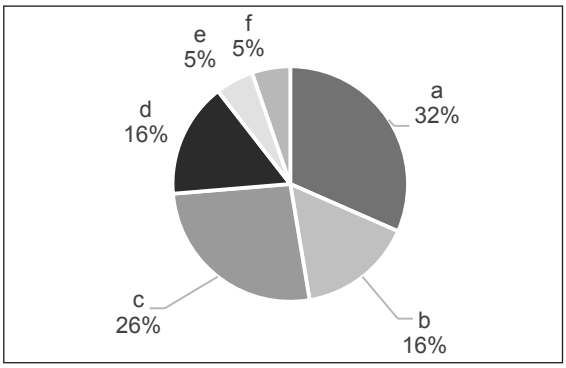
１学年２学年同様に「集中力」についての記載は多く見られたが､合わせて「忍耐力」「努力」「すぐに諦めず頑張れたことです」などもあったことから、落ち着いて制作に取り組めた事を肯定できた生徒もいたようだ。また、技術や技能に関する記述には、「細かい作業があって大変だったけど、本物に近づくように頑張った」に見られる通り、課題の条件として挙げた細かく連続する形を取り入れることを意識できている生徒もいれば、課題作成で使用するカッターナイフの基本的な扱い方を取り上げ「まっすぐ切る」と具体的な学びを挙

げる生徒もいた。これに象徴されている通り、道具の扱い方や物事の理解度にも個人差があるため、このクラスの作品はバラエティーに富んだ仕上がりを見せる傾向にある。

その他には、「失敗したときの改善の仕方」という頼もしい意見もあり、経験を積んだ３学年ならではの踏ん張りを感じた。

図表１４

課題「螺鈿シート切り絵」の制作で、どんな力が身に付きましたか？
※ａ～ｆは生徒の記述を分類した内容
a、技術・技能
b、忍耐力
c、集中力
d、想像力
e、その他
f、分からない・未回答



②課題「篆刻」

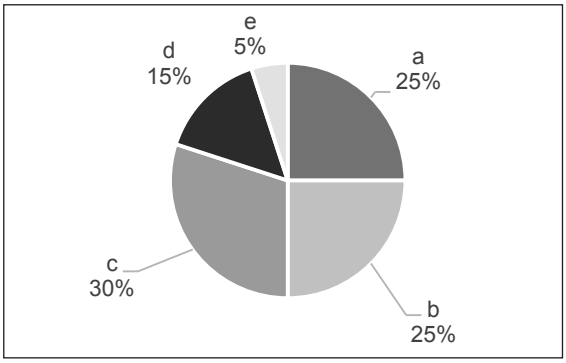
回答の内容が近いものをまとめたところ、大きく５つに分類することが出来た（**図15**）。

天然の石材を扱っているため、落下した場合や金やすりで削りすぎてしまうと割れる可能性がある事は伝達済みではあったが、慣れない作業のため破損させてしまうケースも数名見られた。それを受けて「メンタル」という回答が複数あったと推察される。授業に対し気持ちが散漫になった生徒も見られたことから、「真剣に取り組む力」「最後まであきらめないで作る。」などの制作態度を省みる視点もあった。

技術や技能を指す内容には、直方体の原型からどのように理想の形を彫り出すかという手順や、仕上げを行う際に表面のつやを出すための工程を挙げた記述も見られた。

図表１５

課題「篆刻」の制作で、どんな力が身に付きましたか？
※ａ～ｅは生徒の記述を分類した内容
a、メンタル
b、技能・技術
c、集中力
d、制作態度
e、その他



③課題「油彩画」

回答の内容が近いものをまとめたところ、大きく５つに分類することが出来た（**図16**）。

油絵の具ならではの特性に気付けた内容には「同じ画材でも、油の多さなどで塗った後の印象がかなり変わることが理解できた。」「水彩とは違うので、塗る時の区別というか、どの順番で塗るかが身に付きました」などがあり、新しい描画材との出会いを素直に受け止めている様子が伺える。

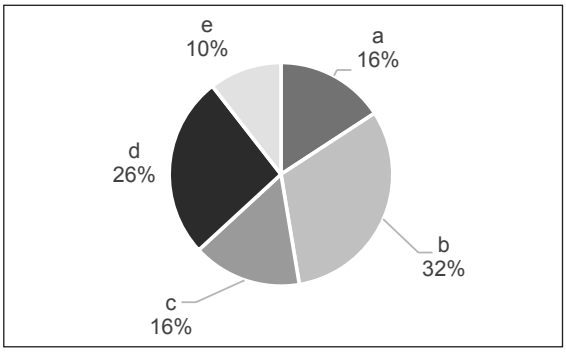
油彩画は未経験の生徒が圧倒的多数を占める為、授業ではオーソドックスな手法を紹介した。キャンバスとよばれる支持体に鉛筆で下絵を描いたあとは、専用のオイルで絵の具を溶き下塗りを

行うのだが、この時の工程に着目した記述も見られた。「色の違いをわかりやすくするために、明るくしたり、暗くしたりする表現が上手くできました。」「下地の色の大切さ」などの回答から学びを大切にする意識が読み取れる。

キャンバスはF6サイズとよばれ、約41×31㎝程度の大きさであるが、初めての油彩画を描く生徒の負担は決して軽くない。しかし、その他の意見には「大きいキャンバスに描く時の楽しさが身に付いた」との前向きな記述も見られた。またユニークなものには、油絵の具独特の匂いに戸惑った様子のストレートな感想もあり、思わず苦笑いした次第である。

図表16

課題「油彩画」の制作で、どんな力が身に付きましたか？
※ａ～ｅは生徒の記述を分類した内容
a、油彩画の特性
b、色彩表現
c、表現技法
d、その他
e、わからない・未回答



6、まとめと課題

本稿では、現場である都立高等学校の１学年から３学年の美術履修者へ対し、複数回にわたるアンケートを実施した。生徒の実態をより正確に掴むことが、今後の指導のありかたを考える上で有効に働くと期待したからである。初回授業時のアンケートでは“身に付けたい力について”問い、単元ごとの振り返りアンケートでは､“身に付いた力”についての回答を求めた。

その結果は各学年によって違いが見られた。１学年は「絵が上手くなりたい」との声が３割にも上ったが、２学年や３学年の回答はより具体的な内容に変化した。これには１学年での学びが下地にあるようだ。様々な教具・教材を通し制作活動の経験を積むことで、幅広い視野を持てることになった事やより深い学びを求めるに至ったと考えられる。

１学年を対象に行ったアンケートにおいて、苦手な課題として多く挙げられたものに“自画像”“デッサン”が見られたが、その理由は「上手に描けなかったから」「絵を描くのが苦手なので」などが多くを占めた。これは前述した“身に付けたい力”である「絵が上手くなりたい」という回答に対応していると考えられる。教育課程における美術では、具象表現を行うために高い技術を習得することは、最重要事項ではない。しかし、その意識に囚われる生徒が多いのは、純粋に活動の経験が不足していることが示唆できる。課題の選定には、幅広い分野を扱う必要があると同時に、生徒の実態に即した指導を目指していかなければならない。

今回のアンケートを集計し考察した上で新たな収穫を感じた事柄に、生徒作品の鑑賞や校内展示の効果が挙げられる。展示された経験のある２学年３学年の生徒からは、「みんなに見てもらうこ

とにより、いい作品を完成させたくなる」「自分の作品が展示されているのは嬉しいし、皆の作品を見るのも楽しい」などの記述が見られ、こちらが想定する以上の手応えを感じた。学校生活の中に美術作品が浸透しつつある様子も汲み取ることが出来たのは、大変喜ばしいことである。１学年の生徒作品も単元ごとに随時展示を行っているため、今後は前向きな意識が育まれていくことを期待するばかりである。

作品の鑑賞や展示を行うことは、生徒の美術へおける意欲や関心を高めることにつながることが立証できた以上、その内容をより充実させていきたいと考えた。特に鑑賞会では、筆者が主導となり進めることが多かったが、今後は生徒が能動的な意識を養えるような指導としていきたい。友人たちの作品をどのように受け止めたのか、参考にしたい点はどのようなところか、更には自分の作品を客観的に省みる機会にもなるような学びを模索していきたい。

生徒同士が切磋琢磨し高めあう姿は、筆者の指導や声掛けだけではなし得ない、大きな効果期待できる。筆者は生徒の意識が高まる環境をしっかり整え、実態に即した質の高い学びが提供できるよう、教材研究を重ねていく所存である。

注

1　吉田陽子（2020）「ポスター作成における制作手順の考察」湘北紀要（41）p.179 ～ 187
2　吉田陽子（2021）「生徒の多様性に則したポスター制作の考察」湘北紀要（42）p.181 ～ 190
3　光村図書出版　美術１　美術２　美術３

Consideration of a survey of attitudes in the creation of the assigned work

Yohko YOSHIDA

【abstract】

In the art curriculum, it is not mandatory for students to acquire advanced skills for figurative expression. Nonetheless, there are many students who are obsessed with the idea of drawing or creating objects □motifs□ realistically. Furthermore, I have repeatedly encountered students who have a deep-rooted sense of dislike for art due to their experiences of not being able to draw or create in an ideal way.

In this paper, I conducted a survey on the attitudes of students who take art as an art elective in high school, and discussed the contents of the survey. When students taking Art I were asked in a questionnaire at the first class about the skills they wanted to acquire through the class, as many as 30% of the students answered that they wanted to become better at painting. In light of this situation, we decided to explore teaching and approaches that are not limited to figurative expression.

【key words】

figurative expression, questionnaire, high school art, awareness survey,
appreciation and in-school exhibition